小坂狷二が遺したもの

後藤　斉

JEI創立100周年記念第106回日本エスペラント大会
さいたま市浦和区 埼玉会館
2019年10月14日

概要

- 　小坂狷二(おさか・けんじ．1888～1969)は1919年末に日本エスペラント学会(JEI)を創立する動きの中心になった。2019年のこの日本大会が「JEI創立100周年記念」と銘打っているのはここから起算している。
- 　小坂のエスペラントへの貢献は運動と著述の二つの分野を挙げることができる。

概要

- 運動面での功績は、JEIという組織を作り、その周辺に人を育て、それによって日本でのエスペラント言語共同体を持続可能で実質あるものにしたところにある。

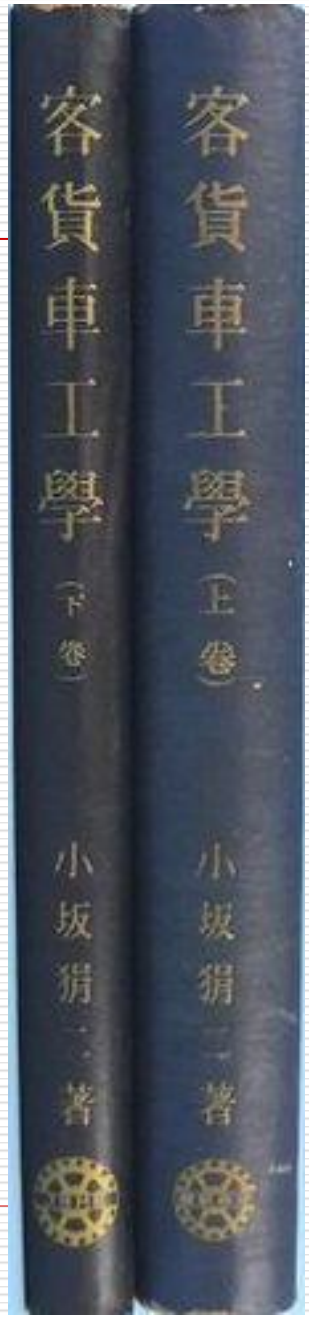
- 著述としては独習書・教科書類と語学論考が挙げられる。教材は多くの人を導いたが、時代の中で実用性は失われている。語学論考は、考え方は参考になる点が多いので、現代風にアレンジできればよいのだが…

2.　人物像

　小坂狷二は、エスペラント発表の翌年の1888年5月に東京で生まれ、1969年8月に没。

　職業軍人の道から進路を変更。一高を経て東大工学部に学ぶ。卒業後、鉄道院(のち鉄道省)に就職し、客車の設計などを担当。東京鉄道局工作課長に進み、のち関連企業で取締役技師長に迎えられ、神奈川大学工学部で教鞭を執った。専門書も著した。技術畑として順調な経歴をたどったと言える。

　鉄道史学会編『鉄道史人物事典』(2013)に取り上げられている。



2. 人物像

エスペラントへの貢献は、本職である鉄道分野の経歴の傍らに行われたのだが、むしろエスペラント運動に一生を捧げたと言っても過言ではない。

18歳の1906年に、二葉亭四迷『世界語エスペラント』でエスペラントを独習した、日本最初期のエスペランティストの一人。当初は居住地の横須賀や東京の日本エスペラント協会(JEA)で活動。JEAの改革のため1919年末に日本エスペラント学会を創立する動きの中心になった。

2. 人物像

JEIは1926年に財団法人化し、日本のエスペラント運動の中心になる。その後、直接の運営は三石五六、岡本好次、三宅史平らが担ったが、小坂の大きな影響力は晩年まで続いた。周囲から「日本エスペラント運動の父」と称されたほどである。

1938年の第26回日本大会(名古屋)で、小坂の生誕50年を記念して、顕著な活動をしたエスペランチストに贈られる「小坂賞」が制定され、今日に至っている。

その死が、「JEI創立50周年記念」をうたった第56回日本大会（東京・日本青年館）の開催から一週間もたっていなかったことは正に象徴的だ。

２．　人物像

　過去を知ることは、現在をより深く理解することにつながり、さらに未来への土台になる。

　小坂は、JEI創立100周年記念のこの日本大会で改めて取り上げるのにふさわしい人物である。小坂のエスペラントへの貢献はいくつかの分野にわたっているが、運動と著述の二つを取り上げるのが適切だろう。

３．　運動面　JEI創設

運動面での小坂の大きな功績は、JEIという組織を作り、その周辺に人を育て、つながりを作ることをうながし、それによって日本でのエスペラント言語共同体を持続可能で実質あるものにしたところにある。

背景として:

1906年に創立されたJEAは興隆、衰退、復活の道をたどった。中心人物は国史学者で東大教授になる黒板勝美。

3.　運動面

黒板勝美
(1874～1946)

第４回世界エスペラント大會（ドレスデン）記念寫眞（明治41年８月）
（前列中央　ザメンホフ博士，左端　黒板）

1906年、JEA創立。
1908～10年の欧米
出張中に米国、フランス、
イギリスなどで
エスペラントで交流。
1908年、新村出とともに
第4回UK（ドレスデン）参加。発言要旨が大会報告書に。

３．　運動面　JEI創設

　幹事長黒板勝美の尽力は大きかったが、その専権的な運営の弊害、特に会計の杜撰さが露呈してくる。印刷所とのトラブルで雑誌の発行にも支障が出ていた。

　1919年12月、千布利雄の意見もあって、小坂は藤沢親雄、浅井恵倫らと改革のためにJEIを立ち上げることにした。クーデターともいえるが、黒板との関係悪化も避けつつ、比較的スムーズな移行を行うことに成功した。

3.　運動面　JEI

JEIには長と名のつく役職を置かず、委員の合議で運営することになった。小坂の案と考えられている。藤沢、川原次吉郎、大井学、松崎克己らの東京の若手が主にそれにあたった。

日本エスペラント學會

規　　約

第一條　本會は日本エスペラント學會Japana Esperanto-Instituto と稱し國際補助語エスペラントの研究、普及、實用を以て目的とす。

第二條　本會の趣旨を贊し會費を負擔する者は何人も本會々員たることを得。

會員は本規約に定むる權利の外本會の諸設備會合出　物に關し特殊の待遇を受くることあるべし。

第三條　本會の會員を分ちて普通、贊助、維持會員の三種とす。其負擔すべき會費は下の如し。但年二回に分納することを得。

(一)　普通會員　年額貳圓。但中等程度以下の學校に在學中の學生、並に特に事情ある者にして庶務委員の承諾を得たる者は年額壹圓貳拾錢とす。

(二)　贊助會員　年額五圓。

(三)　維持會員　年額拾圓以上又は月額壹圓以上。但し一時に百圓以上を納むる者は終身會員とし爾後本項の會費を要せず。

第四條　本會は第一條の目的を遂行する爲下記の事業を行ふ:—

(一)　圖書雜誌の編著出版。

(二)　學校講習會其他研究施設。

(三)　講演會其他普及宣傳。

(四)　エスペラントを使用する學術及實用的機關の設置。

(五)　內外エスペラント使用者間の連絡親睦。

第五條　本會の事務を分擔する爲め庶務、會計、編輯、教育、宣傳等の諸部を設け、各部に委員若干名を置き其合議によりて事業を行ふ。各部の管掌する事務は別に之を定む。

委員は其任期を二ヶ年とし委員會に於て會員中より推薦し總會の承認を受くべし。但再選を妨げず。

各部委員間の交渉並に外に對する本會代表の任に當るため委員中より代表委員一名を互選す。代表委員の任期は一ヶ年とし、二期間引續き選擧さるゝを得ず。

委員會は必要に應じ隨時開催す。

第六條　本會の基金の管理及重要なる事務を議決するため評議員二十名を置く。評議員の任期は二ヶ年とし其の定員の二分の一を本會總會に於て會員中より改選す。但再選を妨げず。

評議員會は必要に應じ代表委員之を招集す。但評議員三名以上の請求ある時は之を招集することを要す。

第七條　本會は毎年一回總會を開き事業並に會計報告、選擧等を行ふ。

總會は規約改訂の決議並に任期に拘らず委員又は評議員全數の改選を行ふ權を有す。

評議員會又に會員十名以上の請求ある時は臨時總會を招集することを要す。

第八條　本會の諸會議に於ける議決は總て絕對多數に從ふ。

諸會議に於て參加資格者は委任狀を以て自已を代表し議決に參加することを得。

第九條　本會委員會はエスペラント普及上妨害となるべき言動をなせる會員に對し退會を命ずることを得。

[入會手續]　姓名住所(振假名附)職業並に會員別(負擔會費年額)を記し申込むべし。移動退會も亦速かに屆出づべし。

[機關雜誌]　本會は月刊雜誌"La Revuo Orienta"を機關として採用會員に配布す。

[假事務所]　東京牛込區新小川町三の十四小坂方(振替東京11325番)。

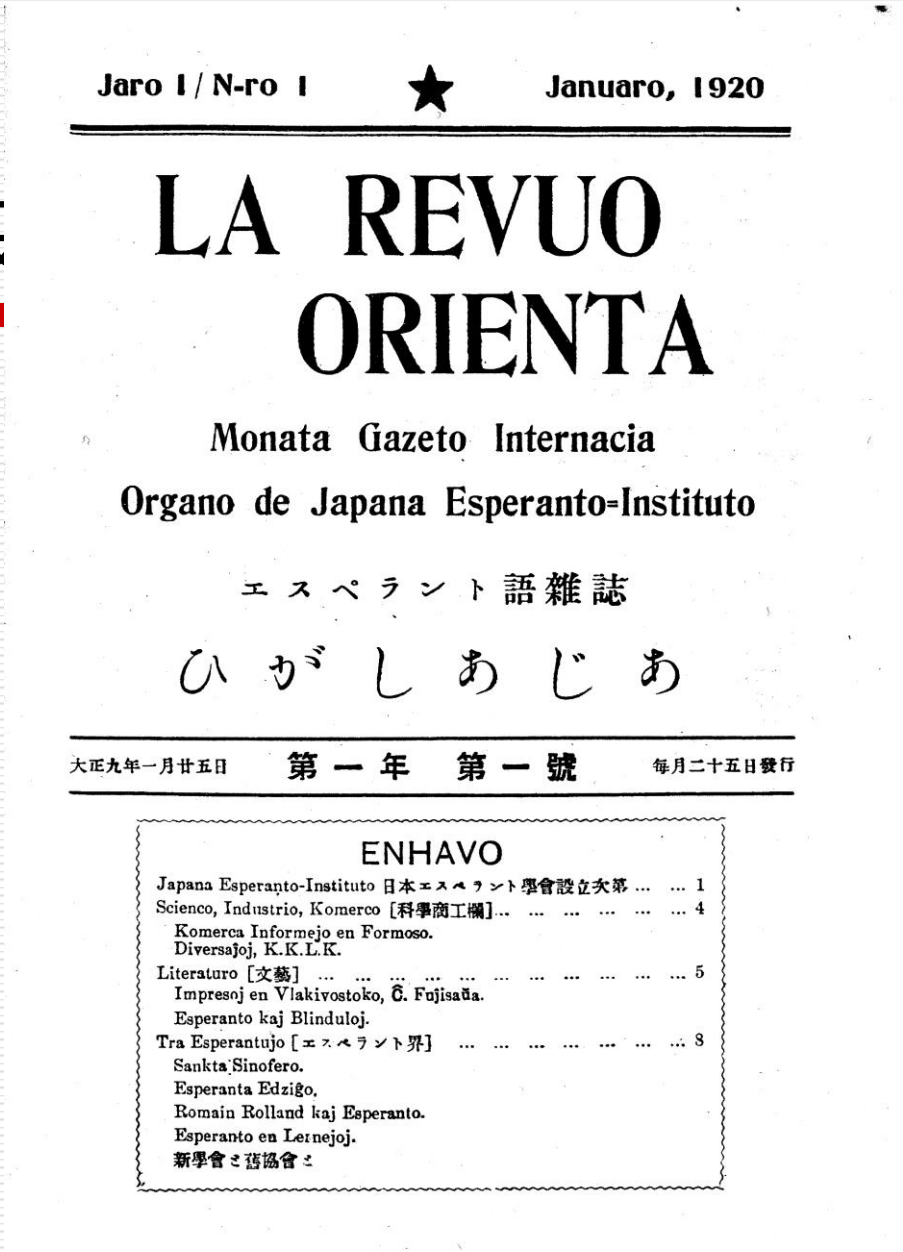
各部委員分擔事務

[庶務部]　學會名簿管掌(會員に關する事務)、照會質問への回答、雜誌圖書注文受付發送、文書受付、學會所有物件保管、他の部に屬せざる事務。[會計部]　會計簿管掌(金錢出納)、基金手元金の保管。[編輯部]　機關雜誌編輯、校正、圖書の著述編纂、エスペラント著作の校閲檢定、飜譯代作應需。[教育部]　語の研究、質疑應答、學力檢定、教授講習、圖書の管理。[宣傳部]　諸會合講演會等の準備司會、內外雜誌新聞へ普及記事の供給、諸種遊說、來遊外人の世話、外國との文書交渉。

3.　運動面　JEI創設

一方で、小坂は大きな個人的負担も負った。

新婚間もない自宅の一室をJEI事務所として提供し、創刊した雑誌 La Revuo Orienta (RO)の編集から発送などの会の雑務もしばらくの間は小坂および家族の無償奉仕でまかなった。



Jaro I / N-ro I　★　Januaro, 1920

LA REVUO ORIENTA

Monata Gazeto Internacia

Organo de Japana Esperanto-Instituto

エスペラント語雑誌

ひがしあじあ

大正九年一月廿五日　第一年　第一號　毎月二十五日發行

ENHAVO

Japana Esperanto-Instituto 日本エスペラント學會設立次第 1
Scienco, Industrio, Komerco [科學商工欄] 4
Komerca Informejo en Formoso.
Diversaĵoj, K.K.L.K.
Literaturo [文藝] 5
Impresoj en Vlakivostoko, Ĉ. Fujisaŭa.
Esperanto kaj Blinduloj.
Tra Esperantujo [エスペラント界] 8
Sankta Sinofero.
Esperanta Edziĝo.
Romain Rolland kaj Esperanto.
Esperanto en Lernejoj.
新學會と舊協會と

3.

? エスペラントとは ?

エスペラントとは1887年ポーランドの人ザメンホフ博士の創造せられた平易なる中立國際語であります。

今や科学、商業、文藝、教育、交通、ラヂオ等各方面に立派に役立つて居ります。

もはや エスペラントをよそにして世界文化を語ることは出来ません。

我々日本人は内に國語を尊重してその健全なるを保證すると共に外には人類の一員としてエスペラントを振りかざし各國と對等の立場に立つて世界文化を盛り立てる責任があります。

生活の國際化はどおしてもエスペラントを要求せずにはおきません。

エスペラントはやがて人種的偏見を亡ぼし四海兄弟の心持を培はずにはおきますまい。

かくて世界の平和は遠からず夢ではなくなりませう。

エスペラントに就いて更に詳しい事を知りたい方は下記日本エスペラント学会にお問ひ合せ下さい。

そして此の有意義な文化運動を支持しやうとする新文化の先駆者は時を移さず本会へ御入会下さい。

財團法人
日本エスペラント學会
東京市牛込区新小川町三ノ七四

３．　運動面　JEI運営

　JEIは1926年に財団法人化し、自前の事務所を構えるようになって、日本のエスペラント運動の中心になる。

　その後、戦争の時代をはさみながら、直接の運営は三石五六、岡本好次、三宅史平らが担ったが、小坂の大きな影響力は晩年まで続いた。小坂はザメンホフの思想に心酔しており、自ら献身的な働きをしたことはその現われであっただろう。

三宅史平

３．　運動面　JEI

　人望もあって、周りに集まった人たちから大いに敬愛された。

　その間、1938年の第26回日本大会(名古屋)で、本人は辞退したが、小坂の生誕50年を記念して、顕著な活動をしたエスペランチストに贈られる「小坂賞」が設定され、今日に至っている。

３．　運動面　小坂批判

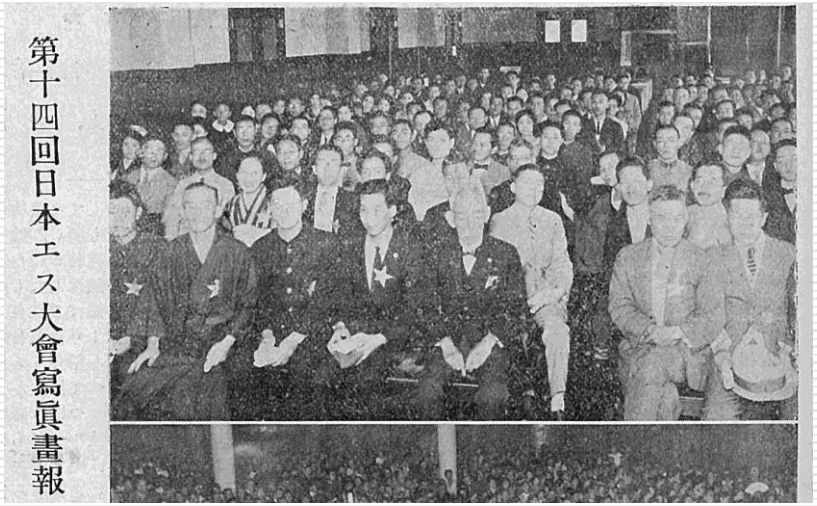
　もっとも、小坂が組織者として完全無欠だったわけではない。小坂の没後2か月で開かれた追悼集会では「過去のエスペラント運動への批判」が言及された。

　朝日賀昇は小坂の生誕100周年を記念する「小特集・小坂狷二」(RO　1989.1)の記事で、「きわめて素朴なヒューマニスト」としての小坂の「思想的な弱点」を中心に組織者としての無能性を指摘し、とりわけ関西連盟(KLEG)との一本化ができなかったことを残念な点の一つに挙げた。

3. 柳田國男の発言

RO 1926.10
第14回日本エスペラント大会
9.24-26 於東京市青山 日本青年館

…次いで柳田國男氏登壇議長就任の挨拶をせられ議長席につかる。…こゝで柳田名議長はこれらをうまくさばいて次のやうな決議をすることを満場にとうて満場一致で可決して紛糾した問題は解決した。



19時過やつと食卓の用意ができたので

一同着席食事が始まり杯の数を重ねるに随つてエスペラントの雰囲気が濃密の度をましてくる。…次いで柳田國男氏が立つて**日本の同志の大同団結を慫慂**された。

３．柳田國男の発言

柳田の意図は明確には分からないが、当時のエスペラント界に結束が足りないと見えたのだろう。百花斉放は一面で羨ましくもあり、言語運動としてのエスペラントにどのような組織形態や運営がふさわしいのかも評価は難しい。JEIが小坂の意思だけで動いていたわけでもない。

とはいえ、千布や梶弘和に十分な活躍の場を提供することがJEIにはできなかったことは指摘できるだろう。

３．　著述

　小坂の組織面での活動が高い語学力に裏打ちされていたことは強調しなければならない。彼は独学でエスペラントの語学力を身につけた。

　1925年9月から1927年12月まで2年以上というかなり長い期間、彼は在外研究員として欧米に派遣された。その機会をエスペラントのためにも使い、北米大会(フィラデルフィア)や第19回世界大会(ダンチヒ)に参加したほか、各地でエスペランティストと交流して、その様子をROに報告している。

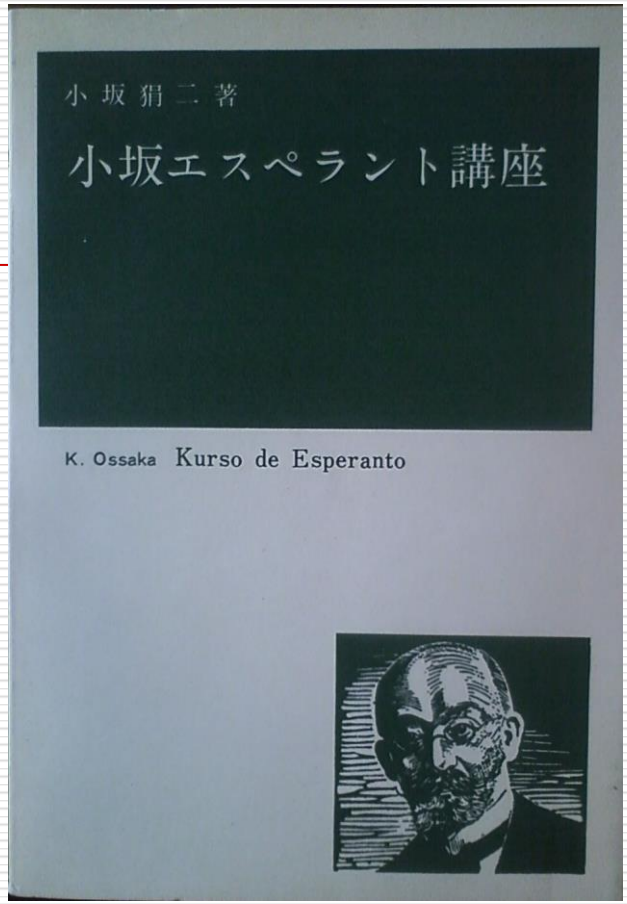
３．　著述

　小坂の組織面での活動が高い語学力に裏打ちされていたことは強調しなければならない。彼は独学でエスペラントの語学力を身につけた。

　1925年9月から1927年12月まで2年以上というかなり長い期間、彼は在外研究員として欧米に派遣された。その機会をエスペラントのためにも使い、北米大会(フィラデルフィア)や第19回世界大会(ダンチヒ)に参加したほか、各地でエスペランティストと交流して、その様子をROに報告している。

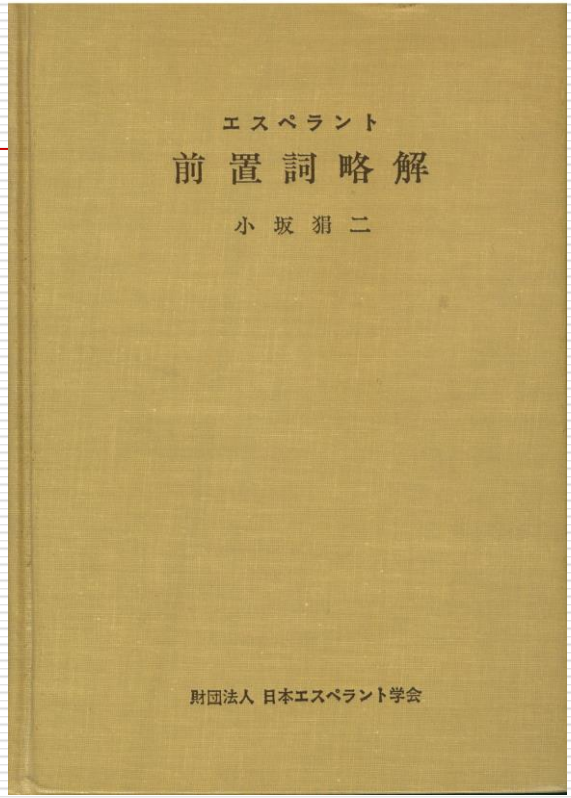
3.　著述

　　『エスペラント捷径』(1927)、『小坂エスペラント講座』(1954)に代表される独習書・教科書類は、日本での代表的なエスペラント教材としてそれぞれ版を重ね、多くのエスペランティストがその恩恵を受けた。ただ、時代の流れの中で、実用的な価値が失われてしまっていることは否めない。



3.　著述

　一見すると『エスペラント前置詞略解』(1943)に代表される語学論考も同様に古びてしまったように思えるかもしれない。漢字の字体や表現全般など外形的にはそうではあるが、その精神はそうではない。前置詞をはじめ「助辞」(品詞語尾のない単語)を重視すること、より一般化すれば、エスペラントの語法のレパートリーを広げて表現力を高めようという姿勢は、今でも見習って参考にできる点が多い。



3.　著述

　小坂は、1908年ごろ正則英語学校で斎藤秀三郎の教えを受け、その英語研究から大きな影響を受けていた。『前置詞略解』にもそれが現れている。

　斎藤は当時英語の達人と称されたばかりでなく、その英語辞典や英文法書には今でもファンがいて、新版が刊行されている。小坂の論考の多くがROに掲載されたまま埋もれているのは惜しい。現代風にアレンジして蘇らせることができればよいのだが。

ご清聴
ありがとうございました。